

「父との約束 ― 消防士への道 ―」

佐賀県伊万里市で生まれ育った牧瀬わか奈さんは、中学校を卒業後、陸上競技を続けたい思いから、地元を離れ、福岡県の筑紫女学園高等学校に入学、陸上競技に打ち込む高校生活が始まった。国見中学校時代には、全国中学校駅伝大会で六位に入賞し、これからの活躍が大きく期待される選手の一人だった。高校では寮生活を送り、朝練、昼休みの筋トレ、夕方からの本練習、そして夜にはウォーキングで一日が終わる毎日だった。夏休みや冬休みも合宿という生活を送った高校時代であったが、故障も多く、辛い日々が続いた。それでも、可能性をもち、いつか治ると信じていた。小学生の頃から陸上競技一筋で、将来の夢も、走ることで以外考えていなかったわか奈さんだったが、卒業後の進路を考える時期に、医師から、「このまま陸上競技を続けても故障が続くだろう」と告げられ、実業団からの申し出を辞退することにした。陸上が好きで、将来も選手として活躍することを夢見ていたわか奈さんにとって、それは大きな決断だった。

「走ることだけ考えていた私にとって、大きな不安しかなかったんです。決断したにも関わらず、迷いと不安だらけの日々でした。」そう振り返る。

高校を卒業して、アルバイトを始めた時、「私は何をしたいんだろう。」と将来について初めて真剣に考え、悩んだ。そんな時「人の役に立ちたい思いに男も女もない。救急救命士[※]は、特に女性が活躍できる仕事だ。」消防士の父の一言から、自分の将来について新たな道を探し始めた。「救急救命士になりたい。」十九歳の時だった。一年後には専門学校に入学し、本格的に専門的な勉強と実習を始めた。入学した時には、「何があっても絶対救急救命士になるぞ！」とポストカードに書き、卒業までの三年間手帳に挟み、肌身離さず持ち続けた。

専門学校までは、伊万里市から高速バスで毎日通った。朝六時半のバスに乗って、学校を終えるとアルバイトに向かい、帰宅するのは夜の十時頃。そんな毎日、夢に向かっていっていると思えば、続けられた。

専門学校三年目の春、就職に向けてあと一年、と気持ちを新たに直後だった。その頃体調を崩した父からの突然の呼び出しだった。自宅には親戚

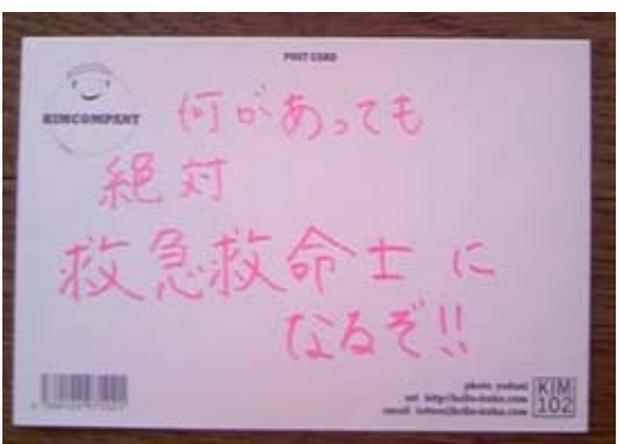
が集まり、「余命三ヶ月、長くて半年。」四十七歳の若さ。言葉が出なかった。父との限られた時間に何ができるのか考え始めた。悔いのないように過ごしたい、そして、お礼が言いたい。

消防士だった父は病氣と戦い、母はできるだけ父と過ごしたいと仕事を辞めた。それでも両親からは、「今年就職は無理でも、救命士の資格だけでも取れるといいね。」と言ってくれた。父と一緒に消防士の制服が着たい。今年、絶対就職したい。彼女は自分にプレッシャーをかけた。女性消防隊員の募集を探し、可能な限り受験した。そして、最終的に広島で三次の面接試験に合格した。余命宣告から半年後、入院治療のかいあって病状を保っていた父は、満面の笑みでたたえてくれた。父にいい報告ができたことが嬉しい。だから、自分が嬉しいというより、ほっとした方が大きかった。

病床の父に「制服姿を見るまで頑張ってたね」とメールを送ると「制服姿、いいね。」と返信された。しかし、願いは叶わなかった。父の闘病日記には、牧瀬さんの内定を喜ぶ言葉が残る。「今日はわか奈の人生が拓けた日。うれしい、すごいことだ。」このページを見ると、涙が込み上げる。

卒業する時、目標を書いたポストカードはまだ手帳に挟んだままだった。「何があっても絶対救急救命士になるぞ!!」人の命を助けることができる人を目指してきた三年間。片道二時間の通学は正直きつかったと振り返る。しかし、牧瀬さんは、何よりも学校に行かせてくれた父と母に、「ありがとう」と一番大きな声で伝えたい気持ちでいっぱいだと言う。

※救急救命士とは、救急医療を行うことができる資格を取得した人。実際に活躍の場を目指すためには、消防士になる人が多い。



佐賀市を始め、試験日が異なる五つの県で一次の筆記試験から挑戦し、岡山と広島で合格、二次試験の体力試験と面接試験に臨んだ。

現在、牧瀬さんは鹿島市の消防署で消防隊員として働いている。人の役に立ちたい、命に携わる仕事がしたいと、夢を実現させた牧瀬さんは、今、充実感や向上心で満ちあふれている。隊のみんなから一人前と言われるようになり、市民の人からも信頼されるようになりたい。父から教えられた、「目標をもって努力すれば、かなわないことはない」ということをいつも胸に抱えながら。

一番辛いのは父なのに、かけてあげる言葉もなく、涙が止まらなかった。しかし、父は現実をしっかりと受け止め、自伝を書き始めていた。「我ながらすごい父だと思いました。」牧瀬さんは、当時の父の姿をそのように思い出す。彼女は、

「目標と今のギャップを少しずつ埋めていこう。自分のためにも、家族のためにも。」
そう思った。

牧瀬さんは、小二の時からずっと日記を書いている。読み返してびっくりしたことがいくつあると言う。一つは、小六の日記に「将来医者になりたい」と書いていたこと。幼い頃から、消防士の父には、救急車で搬送された人が元気になって消防署にお礼を言いに来られた話や救命活動で何度か命が危険な目にあった話を聞かされていたことを思い出した。命に携わる仕事の素晴らしさについて、確かに教えられていたのだと実感した。そして、いちばん大切なのは「家族」と記していた。